

釧路湿原の空と“特撮の空”～ 背景画家・島倉二千六 氏の仕事

高嶋 晃治*

皆さんは『ゴジラ』や『ウルトラマン』といった、往年のいわゆる“特撮映画”に心躍らせた経験はおありでしょうか。ビルを蹴散らし、圧倒的な力で大暴れする大怪獣…遠い星からやって来て、平和のために戦うわれらのヒーロー…。

特撮映画はもちろん空想の産物ですが、登場するミニチュアや風景が、いかにも“つくりもの”然としていては興醒めになってしまいます。画面の中に繰り広げられる世界を、いかに自然に現実のように見せられるか…それが特撮映画に携わる“職人”たちの腕の見せどころなのです。

そうした特撮映画のリアリティを支えるものの一つに「背景画」があります。背景画とは、映画を撮影するセットの背景として使われる、空や風景などを描いた絵のことです。

釧路市立博物館のタンチョウドームに描かれている空の絵は、映画の背景画家の第一人者である 島倉二千六 [しまくら ふちむ] 氏 (1940-) の手によるものです。島倉氏は映画の全盛期であった昭和30年代の東宝作品をはじめ、数多くの背景画を手がけられていますが、主な作品には、『モスラ (1960)』『キングコング対ゴジラ (1962)』など“東宝特撮シリーズ”と言われる一連の作品や、今なお世代を超えて多くの少年たちの心をとらえ続けている『ウルトラマン (1966)』『ウルトラセブン (1967)』、そして“東映スーパー戦隊シリーズ”などがあり、これらのタイトルをお聞きになれば、氏の業績についてはあらためて説明するまでもなくご理解いただけることでしょう。

当博物館は1984 (昭和59) 年に開館しましたが、その前年、タンチョウドームを新たな展示方法として取り入れるにあたり、「湿原に生きるタンチョウの姿を、来館される皆さんにより臨場感をもってお伝えしたい」と考え、島倉氏に背景画を依頼し筆を執っていただきました。

映画の撮影現場における背景画は、撮影が終わるとセットごと解体・廃棄されてしまうため、私たちは通常、島倉氏の仕事を映画やテレビの画面でしか見ることはできません。しかしこのように間近で氏の背景画の実物を見ることができるのは、たいへん貴重な経験であると考えます。

こうして島倉氏の描いた大空を前にしていると、マッハの速度で一直線に飛行するウルトラマンが、あるいは轟音とともに出動するウルトラホーク1号が、皆さんの心に感じられてくるのではないのでしょうか。



写真1. タンチョウのはく製とジオラマに同化する背景画



写真2. これが写真ではなく絵と知ると驚く人が多い